

東日本大震災 復興・支援活動ニュースレター

カトリック仙台司教区・カリタスペース

発行人：平賀徹夫
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座:00170-5-95979
名義:カリタスジャパン

障がい者と、そのご家族に、着実な援助の手を差し伸べていることで、釜石の障がい者関係の人々に、大きな支えとなっている「障がい者自立センターかまいし」が、春休み期間を利用して10人の子どもたちに、「ホースセラピー」の体験を試みました。初体験した中学1年生の成長ぶりをご覧ください。また、震災6年を迎え、7年目を歩み始めているベースも教会も、活動の曲がり角を迎え、いろいろ模索しています。その内のひとつ、八木山オリーブの会は、亘理教会や修道会と協働体制を取るようになりました。石巻ベースで行われたお花見と、米川ベースに長年協力している鷺沼教会の報告もご覧ください。最後に、東北と熊本が「みんなの家」で結ばれているエピソードをご紹介します。

ホースセラピー体験 ～子どもたちの新たな一歩～

障がい者自立センターかまいし

春休み期間を利用して、延べ10名の子どもたちが3日間に分かれ、釜石市橋野町の一般社団法人三陸駒舎にてホースセラピーを体験させていただきました。今回は、セラピー初体験の中学1年生の男子の活動の様子をお伝えしたいと思います。

活動が始まる前、三陸駒舎の庭にあるハンモックにゆったりと寝そべりながら、興味深そうに遠くで餌を食む馬の様子を眺めていた男子。

最初の活動は、馬のブラッシングです。しかし、いざ馬が目の前に来ると、怖かったのでしょう。スタッフの手を引き、遠くまで逃げ出していました。今日は、ここまでで終了かな…というのが正直な思いでしたが、目は馬に釘付けで、時間をかけながら一步一步近づき、皆がブラッシングをしている馬場の中まで入ることに成功。それでもやっぱり馬には近づかず、皆がブラッシングする姿をじっと眺めていました。

続いての活動は、馬の糞拾いです。馬場に落ちている馬の糞をほうきのような器具で拾い上げるのですが、「くさいくさい」と皆が口々に言う中、無言で黙々と糞を拾い上げる彼の姿がありました。

馬場がきれいになると、今度はロープを引きながらの馬の散歩です。馬場の中に入るものの、最初は馬と一定の距離を保ち、ロープを持つとはしなかった彼ですが、馬場の中をゆっくり一緒に歩いているうちに、ロープを持ちたいという仕草を見せてくれました。すかさず、三陸駒舎の黍原豊（きびはら ゆたか）さんがロープを渡すと、こわごわながらもロープを引っ張り、散歩開始です。彼が止まると、後ろについてきている馬も止まり、再び歩き出すとその歩調に合わせて馬も一緒に歩き出す。その繰り返しの中で、少しずつ少しずつ馬に対する恐怖心が溶かされていくようでした。



馬の様子を気かけながら、ゆっくり一緒に散歩ができました

散歩の後、「ありがとう」との意味を込めて馬をなでるのですが、彼はまだ素手でとはいかず、ジャンパーの袖口に手をすぼめ、ジャンパー越しに馬の身体をなでていたのが印象的でした。

いよいよ最後は、乗馬です。なんと、たった1時間前は怖くて近づけなかった馬に、彼は自ら近づき、そして乗ることに成功しました。馬を引く黍原さんも、万が一に備えて彼の身体を横で支える支援員も、

笑顔、笑顔です。この笑顔の連鎖こそが、ホースセラピーの醍醐味のように感じます。馬を下りた後、もう一度、「ありがとう」の体をなでる時、今日初めてジャンパー越しではない素手で馬の体をさすった彼の姿にまた笑顔が広がりました。

子どもたちが新たな一歩を踏み出す瞬間に、何度も遭遇させてもらった春休みの素敵な3日間でした。



～2016年度活動を終えて～

亘理・八木山協働体制の歩み始まる

八木山オリーブの会 野田 和雄

八木山オリーブの会は、カトリック亘理教会で、2月22日に落語会、3月22日に傾聴と活動最終日を迎えるスタッフのご苦労さん会を企画し、津波被災者と笑顔で交流しました。

2月の落語会では、東北大学落語研究会の3名の学生さんに出演していただきました。

1週間前の企画打ち合わせでは、小さな聖堂にどうやって寄席を作るかを話し合い、高座はココにして…イス席は…楽屋は…などの現場確認の他、座布団、もうせん、めくり台、お囃子用音源の分担も決めました。

当初30名ほどの観客を予想していましたが、当日、飛び入り見学される方も加わり、40名以上が集まり、立ち見が出るほど好評でした。3名の学生さんは、各々「はてなの茶碗」「釜泥」「饅頭こわい」を熱演し、会場を沸かせてくれました。参加者の拍手や笑顔が聖堂のマリア様もやさしく見守ってくれているようでした。



落語が終わると、高座を片付けて聖堂にテーブルを入れ、お昼ご飯の準備です。学生落語家さんにも手伝ってもらい、出演者も観客も同じ席でお弁当を食べます。食べながらも、「どこの出身?」「何を勉強してんの?」「あんた巧かったねえ!」と、お年寄りの参加者にとって孫のような学生さんと嬉しそうに話をしている姿が見られました。学生落語家さんたちにとっても、客席が近く、反応が直に感じられる上、感想も聞けるので満足そうでした。

地元の味が、話をさらに盛り上げ、テーブルのあちらこちらで笑い声が聞こえます。「来年も来てくださいね!」と言われて、「私が来年の担当ですので、連絡をください!」と、学生さんもやる気満々です。食後は、いつものように八木山オリーブの会鈴木さんのギターに合わせて、懐かしい曲を合唱しました。



学生落語家さんたちは、落語披露後は私服に着替え、リラックスした姿で参加された皆さんと交流していました

3月22日は、オリーブの会として、これまでの形で行うのが最後ということで、チーム亘理のさいたま教区と、チーム・カリタス仙塩の元寺小路教会、北仙台教会のボランティアスタッフが、見学を兼ねて集まってくれました。また、オリーブの会を励ますため、平賀徹夫司教様も出席してくださいました。総勢50名が集まると、亘理教会の聖堂だけではなく、事務室も2階の部屋も、人であふれていました。カトリック教会の聖堂での津波被災者の傾聴は、全国でも珍しく、平賀司教様には、直接、傾聴活動を見ていただきました。司教様は2階では囲碁に熱中する男性たちとともに席に着き、聖堂では手芸をしながらおしゃべりをしている女性たちを見守っていました。



男性は囲碁や将棋、女性は手芸に、それぞれ熱中

見学参加のある女性スタッフは、台所と会場の連携プレーには、経験が活かされていて「私たちには、とてもできない」と感心していました。また、あるボランティアリーダーは、オリーブの会のやり方に興味津々。特に、男性と女性を別々に楽しませた後、昼食で一緒になり、ギターや歌で盛り上がる流れに注目していました。

このようなオリーブの会の集まりは、津波被災者にとって、笑って話してご飯を食べて合唱する、心の健康のためのフルコースのように感じます。そして、復興住宅の孤独から解放されるこの時が、多くの人にとって貴重な安らぎの時になっているのだと改めて思いました。

次回を約束して被災者の方々が帰った後は、会場を片付けて、聖堂をミサのレイアウトに戻します。各教会の参加者も、イスや机を率先して運んでくれました。

ミサの司式は、平賀司教様、両側にさいたま教区の藤田恵神父様と仙台教区のニコラウス・コンディ神父様(通称ニコ神父様)が並ぶと、祭壇も満員です。今回のミサは、東日本大震災の被災者のために捧げられました。平賀司教様からは、仮設訪問、傾聴ボランティアスタッフへのねぎらいと感謝のお話をいただきました。さらに、訪問参加ができなくても、祈りでの参加を呼びかけられました。共同祈願では、各教会がそれぞれの思いを込めた願いと感謝を祈りました。

ミサの後、長い間、活動を続けてきた八木山ボランティアスタッフに「傾聴活動参加記念アルバム」が平賀司教様から授与されました。三司教(溝部、菊地、平賀)の手書きメッセージが貼ってある1点ものです。疲れてもう辞めようと考えていた八木山オリーブの会のメンバーの中にも、あと少しやってみようと思えば再び歩み始める人が出てきました。

これも参加応援してくださった平賀司教様、藤田神父様、ニコ神父様、さいたま教区、北仙台教会、元寺小路教会の方々の祈りのお陰だと心より感謝します。

※4月3日に、亘理・八木山オリーブの会スタッフの話し合いにより、亘理、八木山の協働体制を作り、ともに歩いていくことが確認されました。今後、八木山が亘理を支援する形で、八木山オリーブの会を八木山→亘理へソフトランディングを目指していきます。具体的には、企画・会計・お茶っこ・広報の担当者を決めて、移行を進めていく予定です。



ミサ後、平賀司教様を囲んで記念撮影

桜の花とおしゃべりと

カリタス石巻ベース 佐藤 光典

2017年4月21日、今年もベース主催のお花見を行いました。今回、私たち石巻ベーススタッフがお花見を企画したのは、ベースを利用されている方同士の交流を深めるためと、なかなか外へ出かける機会がない方や周りの方とのコミュニケーションをとる事が苦手な方たちが、このお花見会に参加することにより、いいリフレッシュになると同時に、お互いの関係を築く良いチャンスになると思ったためです。

当日、オープンスペースは1日お休みにして、利用者さん14名、ベーススタッフ4名、ボランティア3名、サポートセンタースタッフ1名、計22名が車4台に乗り合わせ、去年と同様、東松島市の滝山公園へと向かいました。この日の朝は肌寒く、利用者さんもいつもより1~2枚上に羽織ってのお花見となりました。

お茶とお菓子を持参し、10時30分いよいよベース出発。2~3日前に交通機関がストップするくらいの暴風が吹き荒れたので、桜の花が散ってはいないかな~と不安を抱えながらの出発でした。11時に公園に到着すると、私たちの日頃の行いが良いせいかな(?),桜の花も散らずに私たちを待っていてくれました。奇麗に咲きそろった桜を見て、皆さん一斉に大喜び。早速、花見と散策をする人、公園にある滑り台のところにいち早く行き、滑り台を滑ったり、楽しく語らいながら一本一本の桜を見てまわる方など、各自がそれぞれに、楽しんでおられました。

東日本大震災支援の鷺沼教会の取り組み

カトリック鷺沼教会 石川 清子

桜の花を満喫し、約40分後、公園を後にしました。次に訪れたのは、新たに高台に建てられた新野蒜（しんのびる）駅、東名（とうな）駅。そこでは高台に建築中の病院や復興公営住宅を見て、「震災からよくここまで来ることができたね〜」と涙ぐまれる方もいました。その後、旧野蒜駅で休憩を取り、ベースへと戻りました。途中、各車の中では、民謡や懐メロなど、ある車では俳句まで詠って楽しみ、皆さんそれぞれが、満足して過ごされていたようでした。



千本桜の名所「滝山公園」
満開の桜の出迎えに、参加者の皆さんの笑顔も満開に♪

ベース到着後、用意してお弁当とお味噌汁で昼食をとりました。各テーブルに参加者さん同士が向かい合い、行ってきたばかりのお花見の話しながら、楽しく食べていました。昼食後、仙台から来られたボランティアさんの弾くアコーディオンの伴奏に合わせて、春の歌や、参加者がリクエストした曲に踊りを付けて合唱したり、楽しい時を過ごしました。

参加者のお一人が車の中で詠まれた俳句をご紹介します。

「桜散る 野山はピンクの 花ジュウタン」

「春嵐 一夜で散らす 花愛おし」

「車窓より 全山に見ゆる 桜花」

「桜木の 花の終わりは 緑の芽」

これを詠まれた方は、毎日と言っていいくらいベースを利用されている方で、ベースが居場所のようになっていると冗談をおっしゃっている方です。皆で一緒に出かけ、一緒に歌い、語らうことができ、本当に楽しかったと、皆さん口々におっしゃいました。その笑顔を見ていると、本当に企画して良かったと改めて思いました。

さあ、この次はどんな企画をたてようかな！？



お花見後は、ベースで歌や踊りをして楽しい時間を過ごしました

東日本大震災の直後、青年たちが被災地に出かけていき、実際に目で見たことを報告してくれたのが、鷺沼教会と被災地との最初の接点でした。横浜教区第二地区としての物資援助が終了した7月、これから先の支援の形態を探るために、被災地視察に出かけましたが、その頃はまだ被災地のあちこちに、乗用車や消防車が転がっている状態で、その惨状を目に、支援の形が何も浮かばなかったことを思い出します。

10月に、米川ベース千葉道生さんに現状報告会をお願いしたところ、支援は力仕事ばかりでなく、仮設住宅での「お茶っこ」には、時間や体力がない女性でも必要とされていることを知りました。すでに女子修道会が会を超えて始めていらしたシスターズ・リレーが素晴らしいと思っていましたので、リレー式なら、教会の中で人を募って続けていけるのではないかと思いつきました。11月から長距離バスを選び、回数券をまとめて購入するなど、鷺沼教会として南三陸へのルートを決め、お茶っこへの参加者を募りました。当時は、仙台教区サポートセンターから土曜日朝に出発する車を利用するという、固定ルートでスタートしてみることにしました。

年明けから本格的に開始。はじめは経験者と未経験者の二人がペアで出かけていき、経験者となった人が、次には未経験者を引率するという方式です。これなら、知らない土地に一人で行く不安が無かったので、希望者を集めるのはさほど苦労はしませんでした。経験者の数を増やしていくことで、春には「鷺沼教会から毎週末、誰かが出かける…」という体制をとることができました。皆が慣れて余裕が出てきた夏には、毎週一人、出発の曜日と時間は自由、米川ベースに宿泊、要請のある支援作業をし、土曜日には志津川小学校の仮設でのお茶っこを手伝い、帰京する…というスケジュールになっていきました。



志津川小学校からの眺め（2017年4月下旬）
嵩上げされた土地に新設されたさんさん商店街がみえる

主婦は、自由な時間がありそうですが、まとまって家を空けられない場合が多いので、教会として取り組むためには、ちょっとの時間でできる支援体制づくりは重要でした。そして、教会から交通費援助をいただくのですから、個人として動くのではなく、“チーム”として取り組むこと、あてにされるように続けること、を目指しました。

このような体制で順調に動きだしたころ、プロジェクトのメンバーが、「川崎市が東北支援に対して補助金を出している」と調べてきてくれたので、申請をしてみようということになり（申請手続きには、かなりご苦勞があったようですが…）、“毎週出かけている”ことが評価されたのか、市から補助金をいただくことができました。これは、プロジェクトとして、大きな励みになりました。

だんだんと出かけるメンバーは限られていきましたが、続けているうちに仮設住宅での顔なじみもできましたし、どれもほぼ初体験の農業支援や漁業支援をすることで、ボランティアとしてというよりも、“また知り合いに会いに行く”気持ちになっていったのは、私自身を含め、うれしいことでした。

昨年の夏以降、仮設住宅から巣立っていく方が多くなったことで、お茶っこの参加者も減り、今年3月6日に、志津川小学校仮設住宅の自治会解散式・昼食会が開かれました。住民の方々からもそして、「カリタスさん」として親しまれている米川ベースからも、昼食会へお招きをいただきましたので、鷺沼教会のこれまでの参加者に声掛けをして、7名で出席してきました。すでに仮設を出ていらした方々の参加もあり、懐かしい再会で、笑いあり涙ありの楽しいひと時でした。



自治会解散式・昼食会の様子 挨拶をされる自治会長さん（写真左端）

自治会が解散したことで、志津川小学校仮設住宅でのお茶っこに行く機会はなくなりましたが、まだ農業支援、漁業支援の要請はあるので、鷺沼教会としての支援は続けることになっています。米川以外にも、岩手県大槌ベース、福島やさい販売と、それぞれの“縁”を大切にしてきました。これからも、この繋がりを大切に、それぞれにできる支援を続けてまいります。

これまで、私たちにも支援活動のチャンスを与えてくださった、主任司祭をはじめ、教会共同体の皆さまに、心から感謝したいと思います。



解散式に参加した鷺沼教会7名と米川ベーススタッフ

**カリタスジャパン「熊本地震緊急募金呼びかけ」継続中
カトリック福岡司教区「熊本地震支援金」受付終了**

熊本地震から丸1年を迎え、これまでに国内外の教区、教会、団体、個人から物心両面の多くの支援がカトリック福岡司教区に寄せられましたが、カトリック福岡司教区が受付していた「熊本地震支援金」につきましては、2017年3月31日をもって受付終了となりました。（カトリック福岡司教区のHP内「福岡教区被災者支援室」支援室通信に詳細が掲載されていますので、ご覧ください。）

今後、熊本地震に対する支援金につきましては、カリタスジャパンの〈熊本地震〉緊急募金呼びかけが継続されていますので、そちらの口座へお振り込みいただけますようお願いいたします。

【カリタスジャパン〈熊本地震〉募金受付口座】

郵便振替番号：00170-5-95979
加入者名：宗教法人カトリック中央協議会 カリタスジャパン
*通信欄に、「熊本地震」とご明記ください。

《東北と熊本のつながり》

2011年、東日本大震災発災後、家を無くしたり避難を余儀なくされている方々に、熊本県が、精神的な安らぎを感じられる空間「みんなの家」を提供するプロジェクトを展開しました。熊本県産の木材や畳表を使用し、同県の建築関係者が組み立てた交流施設「みんなの家」第1号は、2011年10月、宮城県仙台市宮城野区福田町南一丁目公園内の仮設住宅隣に、完成しました。※「みんなの家」は、被災3県（岩手、宮城、福島）に6年がかりで、計15棟建設されました。



2011年10月28日 熊本県の支援によって建てられた「みんなの家」お茶っこ場所として、カトリック元寺小路教会の方も利用していました

「みんなの家」第1号が建てられた福田町南一丁目公園内仮設では、カトリック元寺小路教会の信徒の方々が、2011年9月から2015年7月までお茶っこを行っていました。2017年4月、この「みんなの家」第1号は、仮設入居者の多くが震災前に住んでいた宮城野区岡田新浜地区に移築され、「新浜みんなの家」という新しい名称で、津波記憶の伝承拠点として、また地域住民の交流の場として、今後も利用されていくことになりました。

「みんなの家」プロジェクトは、その後、2012年7月12日の熊本広域大水害において整備された応急仮設住宅において、同年11月、阿蘇市に2棟建設されました。そして、2016年熊本地震においては、内閣府との協議により、20戸以上の応急仮設住宅団地の集会施設は、木造の「みんなの家」として整備することになり、今年2月17日までに、62団地に84棟が建設されました。

熊本地震の被災地での取り組みにおいては、東日本大震災や熊本広域大水害での経験が活かされ、被災者の孤立などを防ぎ、コミュニティづくりにつながるようなプランとなっています。また、仮設入居者がすぐに利用できるよう、これまでの経験をもとに「規格型『みんなの家』」が設計されました。規格型に対し、これまでの「みんなの家」は、入居者などとの意見交換をもとに計画され進められてきたことから、「本格型『みんなの家』」と呼ばれ、熊本地震においては、80戸以上の大規模仮設団地において、「規格型」が建設された後に、「本格型」が8棟整備されました。（*熊本県HP参考）

東日本大震災から丸6年以上が経過し、被災地の大きな課題の1つとしてコミュニティづくりが挙げられていることから、交流の場となる「みんなの家」のような場所は、今後、より重要視されていくように思います。

【2011年 福田町南一丁目公園内仮設でのお茶っこの様子】



（写真左）仮設集会所でのお茶っこ 床に座るのが大変なお年寄りの方などが、利用しにくい状況でした

（写真右）「みんなの家」でのお茶っこ 椅子に座ってゆっくりお茶ができて、木の温もりが感じられる空間のため、多くの方がお茶っこに参加されていました

ニューズレターのメール配信をご希望の方は、お名前などをご記入の上、s d s c k o h o @ g m a i l . c o m までメールをお送りください。多くの方に活動状況や被災地の現状を広めていただけますようお願いいたします。